

戦争経験者が大洗で戦
車道やります

フード被りの黒猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イラク戦争が終わり、大洗に来た…少年海月零は転入してきた、西住みほと出会い共に戦車道に入部する、しかし彼は周りからあまり良く思われていなかった、まあそりやあとうぜんだ、最近まで女子校だったからな！

小さ頃に親に捨てられ、米兵の拾われた少年海月、しかし任務中に仲間を失いゲリラの仲間になる

目次

1話『転校生』	1
2話『説得』	19
3話『T44買います!』	33
4話『お友達?』	51
5話『教官が来ます!』	68
6話『本気』	81
7話『練習試合の為の練習』	95
やべ、順番間違えた	113
8話『FBIだ!』	120
9話『大洗町』	134

1話『転校生』

はあ……大洗学園に入って1年かあ……今年から2年か……学校は居辛しいし……休む事も無理だし……せめて高校を卒業しないといけないし……イ○クに居た方がマシだなあ……まあ常に死と隣り合わせだけど……米さんも酷いもんだなあ……拷問されるし拘束されるし痛めつけられるし……

……学校の方がマシだな……はあ……じゃあ行きますか、
学校戦場に行きますかね

く教室く

ガララ

……うわあ……すんげー嫌な顔で見られてるぜ……

まあ当然か……最近までは女子校らしいし……はあ……

居ずらい……家に帰って布団に入りたい……とつ担任が入ってきた

「え〜おはようございませす」

「「「おはようございますー！」「」」

るっせえな…

「担任のくくくです、1年間よろしくお願いします」

ア、ア、ア、ア、ア、死ねう、帰りたいよー

「では、入ってきてくださいーい」

よし、寝よ

「えと、西住みほです！、よ、よろしくお願いします！」

ああ…転校生か…では昼休みまで…

く昼休みく

ふあくよく寝た…もう昼休みか…食堂…は辞めとこ

少し少し遠いけどコンビニに行きますかね…

椅子から立ち上がり教室を出ようとしたら

ドサツ

肩がアンパーンチ

「あつワリいい」

「あつ大丈夫です……」

ん？ああ今朝の転校生か……暗い顔してるなあ……まあ関係ないけど

俺は限られた時間でコンビニに入り、弁当とお茶を買って小走りで学校の屋上に向かい空いてる所に座る

ふいふ疲れたく残り時間も少ないし……食べますかね

うい……美味しいなあ……イラクにいた頃はクツソ不味い戦闘食だったなあ……あれ……人間の食いもんじゃやねえよなあ

ごちそうさまでした……うんじゃあ、教室に戻りますかね……

く教室く

ガラガラ

……うん……目線が痛い、えつと……転校生はオロオロしてるなあ……まあいきなり静かになったからな！

うんしよ……うんじゃあ放課後までおやすみ……

く放課後く

ふあく寝みい……もう放課後かあ……帰りますかね……

はあ……もう……学校やだなあ……嫌われてるし……やつぱり顔か!?、顔なのか!?……はあ

く…あれなんだろうなあ…皆はイケメンが入学するーと思ったら俺みたい不細工が入学して…期待外れ…だろうな…期待されてもなあ…いや…違うな…自分で言うけど俺の顔は平気的のハズだ…じゃあ、あれだな…前までは女子校だったのにいきなり共学になったもんなあ…いやらしい気持ちで入学したって思われてるかもなあ…

違うんだよ……適当に選んだ学校がここだったんだよ…

俺もビツクリしたよ、大洗は前までは女子校って、…

転校したいなあ……いや、学校は嫌いだし……イラクに戻ろうかなあ……つと家に着いたあ…

ただいまー……1人だけ…

(ーーのー) σ ピンポーン♪

ん?配達か?

はーい、今出マース

ガチャ

「あつ遅くにすみません、私隣n…」

「……………」

転校生でした……

「あつ、えと……西住……みほ……です」

「あつうん……海月うつきです」

みほ「これ……つまらない物ですが……」

零「いえいえ……」

零「……あがつていく?」

みほ「お、お邪魔します……」

取り敢えず………西住は机でチョココんで正座してるけど……

気まずい

やつだつて……今日会ったばかりの人を部屋に招き入れるとか……西住もなんで疑いなしに入ったんだろ……いやまあ俺が招いたけど……

零「えつと、西住、菓子……食べる？」

みほ「い、頂きます」

………話題を考えろ!!なにか!なにか!!

みほ「う、海月くんは……なんで大洗学園に入学しようと思つたの?」

零「………適当に選びました………」

みほ「あつそ、そうなんだ……」

零「西住もなんで大洗に?」

みほ「私は……戦車道がなかったからかな?」

零(なぜ疑問形……ん?)

零「西住、戦車道ってなんだ？」

みほ「えっ、戦車道知らないの？」

零「知らんな」(キリッ)

みほ「戦車道っていうのはね、~~~~~」

零「~~~~~」

~~~~~って便利だよなあ……………

西住「だから、戦車道がない大洗を選んだの…」

零「ふくん…まあ、逃げてもいいじゃね？」

みほ「えっ？」

零「戦略的撤退っていうじゃん？、だから嫌な事から逃げる事も大事」

みほ「でも、私のせいで負けて…」

零「まあ、天候でマップ？場所？は荒れるし、だからまあ自分が助けたいから動いたならいいじゃん、その子の命も助かった訳だし…」

みほ「……………」

零「……………まあ、明日も早いし、風呂に入ってスッキリしたら？」

みほ「……………うん、そうするね、お邪魔しました…」

今更「……………」

零「……………西住流ってなに？」

〱翌日〱

うい〱眠い〱学校めんどい〱サボりたい〱……………

うん……………サボるか……………どうせ教室に居ても皆が学校に来んなつの視線を向かれるし

……………

屋上は……………確か使えるはず……………うっし、行きますかね

〱屋上〱

まだ1限目だけど……………まあたまにはいいよね……………

特別クラスないかなあ……………男子専用のな？……………寝よ

みほ side

はあ……1人は寂しいな……海月くん……友達になってくれるかな？……そいや今日海月くん教室に居なかつたけど……お休みかな？……それとも昨日遅くまで居たから寝坊してるのかな……

「heeーi彼女!」

みほ「えっわ、私ですか?」

「ほら、沙織さん、西住さんが驚いてるじゃないですか」

「ああ、ごめんね」

「宜しかったら、お昼御一緒にどうですか?」

みほ「私とですか?!」

「うん! (はい)」

く食堂く

「えへへ、ナンパしちゃった」

「私達、西住さんとお話してみたかったんです」

みほ「そ、そうなんですか?」

「いっつもあわあわしてて、面白いんだもん」

みほ「お、面白い……」

「あつ私の名前はね」

みほ「武部沙織さん、6月22日生まれ、そして五十鈴華さん12月16日生まれ……」

沙織「誕生日まで覚えてくれたんだ」

みほ「うん、名簿を見ていつ友達になってもいいように」

沙織「やつぱり、みほりんは面白いね」

西住「み、みほりん？」

沙織「みほ、だからみほりん、ダメたかな？」

西住「ううん！、友達みたいで嬉しい！」

五十鈴「友達みたいって……」ニガワライ

五十鈴「私もみほさんと呼ばせていただきますね」  
わたくし

みほ「うん！」

五十鈴「あつあの席空いてますよ」

沙織「あつ本当だ、じゃあ、あそこで食べよう」

「おぼちゃん、いつものー」

みほ「あつ」

みほ「皆さん、お願いいいかな？」

沙織「なにになにー？」

五十鈴「はい、なんですか？」

みほ「あそこにいる男の人を誘ってもいいかな？」

五十鈴「私は構いませんけど……」

沙織「えー私、告白されたらどうしよー!？」

みほ「あ、あはは……」

## 零 s i d e

ふあく寝みいく今何時だよ……げっ昼休みかよ……

やつべー午前授業サボっちまった……

こりやあ……指導室だな……ぐへえ……腹減つたなあ……

コンビニは……時間もないし……食堂に行くか……はあ……取り敢えずさっさと貰って屋上で食いますかね

く食堂く

うーん、目線が痛い……

「あつ、女子校目当てで入学した人だ」

「聞こえてるよ……もう少し小声で喋れよ……つか、一体どこからそんな噂が飛んだんだろ………とっ俺の番か」

「おぼちゃーん、いつものー」

「ん？おや、珍しいねえ、他の子より遅く来るなんて」

「いやー授業をサボってたら遅くなち待ってね」

「駄目だよ、ちゃんと勉強しないと、バツとしてトマト10個ね」

「ちよー！、それはないよーおぼちゃんいや、お姉様、せめて5個でお願いします」

「もうくじやあ3個ね」

「ありがたき幸せ」

「はい、あんたまた屋上で食べる気なの？、たまにはお友達と食べなさい」つ弁当

「うーん、俺は1人が好きなんです」つ弁当

「そうかい、ゆつきり噛んで食べるんだよ」

「分かってるって………さて屋上に行きますか」



「う、海月くん！」

海月「あつ?…えつと西住か、どしたの?」

みほ「よ、良かったら一緒に皆で食べない?」

海月「皆?…」チラ

五十鈴「ニコニコ

沙織「どうしよーもう／＼／」

何か…怖えんだけど…………

みほ「ダメかな?…」

海月「いやーこのあと外に用事があってな（嘘は言つてないぞ）」

みほ「そつか…じゃあ明日一緒に食べよ！」

ええ…………

海月「ちなみになんで一緒に食べたいの?」

みほ「お、お友達になりたいから…だ、ダメかな?」

海月「友達…ねえ…………」

『エンジンがイかれやがった!』『ゼロ!!このままじゃあ殺られるぞ!』『3時方向に戦車アア!』……………嫌な記憶だ……………

零「西住、悪いが友達の件は考えておくわ」

みほ「う…うん、分かった…」シヨンボリ

………はあー………

零「さつきおぼちゃんに誰かと食えと言われたし、一緒に食ってもいいか？」

みほ「!!」パァ

みほ「こつちだよ！」

零「へいへい…」

うんじゃあ俺は端っこに

五十鈴・武部

零・西住

◀こんな感じ

五十鈴「初めまして、五十鈴華と申します」ペコリ

沙織「私は武部沙織だよ♪」

零「…海月だ」

みほ「皆、手を合わせて」

みほ「頂きます」

「「頂きます」」

その後は武部に好きな物とはかなんで大洗を選んだの？と色々質問された、五十鈴も興味深々で飯を食いながら聞いてたし、西住はよほど嬉しかったのかずつたニコニコしてるし、うんで食べ終えて教室に戻って椅子に座ろうとしたら扉から生徒会メンバーが入ってきた、西住が拉致られました……………アイツ何をしたんだ？……………リンチ？  
そしてー放課後だー、うんで靴を履いて、帰ろうとしたら西住に声をかけられました……………なんでも会長さんが戦車道復活！つと……………西住に入部してもらいたいみたい……………

えっ？……………大洗って戦車道あったんだ……………

うんで……………西住と話しながら校門に向かってたら後ろから生徒会メンバーに拉致られました……………ついでに西住も……………なんで？……………このパターン……………俺も？入部展開？……………

〜生徒会室〜

「いや〜いきなり悪かったねえ〜」

……えっ?……中学生?……

「きみい失礼な事考えてない?」

零「なんの事やら……」

ウホツ♂エスパーカーかよ……

零「うんで、会長さん俺にナニカヨウデスカ?」

「実はね君に戦車道に入ってもらおうと思って」

零「えっ?戦車道って男もできるの?」

西住「えつと認められてるけど……実例は……ないかな」

零「へえ……で、会長さんなんで俺に?俺以外に男子は居ると思うけど?」

イケメン氏ね

「戦車が好きそうだから」

零「好きそうって……いやまあ……男ですし……好きっじやあ好きですけど……」

まあ、もう二度乗りたくないけど……

零「それに部員が嫌がるんじゃないんですか?、女子に男が居るのは……」

「大丈夫だよ」

零「ええ……」 困惑

「西住ちゃん、別にいいよね」

西住「わ、私は……………」

……………」

零「会長さん…悪いけど俺は入らねえから、うんじやそゆことで」

「……………」西住ちゃん…退室してくれないかな？」

西住「？ わかりました」

？…何を考えてんだ？…

まあいい…俺も出るか…

ドアノブに触れた時誰かが呟いた

「……………」対米軍撃退00小隊…通称 4219隊」

ビクン

零「……………」

「組織に貴様の名前があったのだ、ROZE・KITU元に戻すとレイ・ウツキ」

「その組織は2年前に米軍による空爆で全滅と言われている…だが生き残りが1名…」

その名は…」

「海月零…別名・死神」

## 2話『説得』

.....

零 「名前が似てるだけかもよ」

「いや、組織にアジア人が居たと言われてる」

零 「だったら「政府はイラクに日本人の子供が少年兵として闘っていたことを伏せた、世間に知られれば問題だからな」.....」

バレてるね...いや、正確には日本とタイのハーフなんだけど.....うーん...退室したい  
零 「そうだ、俺が元4219隊の隊長だ...つつても俺1人だったけどな」

「ふむ」

ん？何かすげえドヤ顔だな...

零 「それで?...世間の見世物にするか?、そしたらマスゴミが来るかもねw」

「.....」

零 「.....悪かったよ.....で?」

会長 「少しお願ひがあるんだよね」

零 「戦車道をやれと?」

会長「うん」

零「戦争でもするのか？」

会長「ううん、数ヶ月に大会があるんだ」

零「大会？……俺に参加しろと？」

零「嫌だよ……」

会長「大丈夫」

いや、何がだよ……俺は嫌なんだよ

「うんで、事情ってやつか？」

会長「うん、訳ありでね……」

ふーん……参加したくないなあ

零「てことは戦車は持つてるのか？」

会長「今はないね」

零「じゃあ……戦車はどうすんよ……参加でないじゃん」

あつても参加しないけど

「先輩方が残してくれた戦車を探す……かな」

残してくれた？……

「貴様にも手伝ってもらいたい」



めんどくさそう…

零「まあ、いいけど……」

あつむつちやウンコしたい……やばいやばい!! 漏れそう!?

零「ちなみに参加したら俺にメリツトは？」

会長「干し芋1年分!」

いらねえ! つか、なに目をキラキラしてんだよ……ん? 会長……何か食ってんな……  
「会長、今は食べないでください」

あつ怒られた……俺も怒られそう……漏れそう……我慢だ!!

零「会……長さ……ん……」

会長「ん? なにー?」

零「それでテヲウトウ」

ええい!、もうなんでもいい!

「ほんとに!?!」

「貴様はそれでいいのか……」

零「だから……今日の所はここら辺で……」

ウオオオオオ!!

零「では!」

何か後ろから声があるけど無視だ

俺は後ろに振り向き、そのまま退室する

漏れる?!?! えっ? 学校ですればいいだろ? ……ふっ俺は家じゃないとできないんだよ

!

俺は靴を履き、校門を出ようと、後ろから声を掛けられた

みほ「う、海月くん、一緒に帰らない?」

NOOOOOOO!!

零「……………2人は?」

マジかよ!! ……あつ……………いや! まだだ!

みほ「先に帰ってもらったよ」

ヒツヒツヒツフ……………ん? 何か違うな……………なにか話題……………はっ!

零「…なあ……………戦車道……………やるのか?」

みほ「……………まだ分からないかな…」

零「やっぱり……………去年の事か?」

みほ「……………」

零「……………すまん」

よし! 西住には悪いけどトラウマを思い出させて貰った!

家に着き部屋急いでトイレに直行

はあー……………どうすつかな……………男が戦車道……………世間的に印象悪いだろうなあ……………でもなあ約束したしな……………あ……………おおお……………今デツカイノガデター……………。(▽)。

—!!

ふむ……………ちよいと……………大洗を調べるか……………

く大便が終わりく

ははあーん、そりやあ焦る訳だ

大洗は20年前まで戦車道があり、最近入学者が減り、共学になって生徒を増やそうとしたけど時間が掛かってしまう……………間に合わない……………廃校……………か……………こんな感じだな……………まあ、優しいおばちゃんの為に考えますかね

あと……………男が戦車道をやるは……………実例ないなあ……………俺が初かあ……………嫌過ぎる明日も学校だし……………早めに寝るか……………

く翌日く

p i p p i p p i

うんご……ふああ〜ねみいー…今何時だ？

7時57分

………やっべー……遅刻じゃん……あつ、ウンコしよ

俺は急いで支度して家を飛び出す、途中でフラフラした女の子が声を掛けてきた  
クツソオオオオ!!満足にウンコできなかつた！

「おお、その人よ助けてくれ〜」

ええ………何かめんどくさそう

零 「どしたの？」

俺の腹がやばいんだけど…

「眠くて…歩けない……」

ええ………

「頼む……学校まで連れてっ行くれ……」

ええ………

「ええ………しやあねなあ」

俺は女の子を担ぐ

オフツ……腹に衝撃が………

「すまない」

零 「おう！礼は3倍で返せよ」

「金を取るのか…」

零 「今金欠でな」

まあ冗談だけど

零 「そいや、名は？」

「冷泉麻子、あんたは？」

零 「海月だ」

麻子 「海月さん、もう少ししっかり固定してくれ、落ちる」

零 「贅沢な奴だ、にしても死人の顔してるけど…どした？」

麻子 「朝が苦手だ…けど行かないとまずい…単位が足りない…」

零 「そつか…まあ無理はするなよ、たまには学校サボってもいいと思う…まあ留年は  
確実だけどな！」

麻子 「眠い…」

零 「じゃた学校で爆睡方法教えてやる、そもそも単位なんて出席すればいい訳だから  
その後は保健室で寝ればいい、まあ買収しないとダメだけど…まあそこら辺は自分で考  
えろ」

麻子「ー!…そうか…その手があつたか…海月さんこの礼は必ずする」

零「いや、いいつす」スマホ見る

ギリギリ間に合うかな……

く教室く

ふう……間に合わなかつた……いや間に合つただけだね……おカッパな風  
 紀員に見つかつたんよ……なんでも……ちゃんと授業を受けろーだの、顔洗いなさ  
 いて……多分だけど俺じゃないよね?……だってあの3人組知らねえもん  
 ……オマケにウンコが漏れそうになつたから一旦家に帰つたんよ……うんで今3時限目  
 に登校したわけ……そして西住達はチラチラ俺の事見てる……見るなよ……気ま  
 ずいよ……

ピンポンパンポーン♪

ん?

『2年の海月、西住、五十鈴、武部、至急生徒会室へ』

えっ？授業中に？

ふむ……………バツクレヨ……………

『海月ちゃん、バツクレようかなつなんて考えてないよね？……………考えてたら……………生徒会に入ってもらおうよ？』

うっし!!行つくか!……………ビビってねえよ?

く生徒会室く

とっ……………中に入ったら……………何か……………すんげえことになってる…

「そんな事…言ってると居れなくしちゃうよ」

おい、会長ぜってえ悪役だろ

華「脅すなんて酷いです」

「会長は本気だ」

「今すぐ謝った方がいいよ」

つか3人の名前知らねえなあ……

零「すんません、遅れましたー」

「ん？遅かったね〜」

零「すんません、で……喧嘩つすか？」

沙織・華「聞いてください（よ！）」

はいはい聞きますよ

華「会長さんが西住さんを無理矢理戦車をやらせようとしてるのです」

沙織「海月も何か言ってるよ！」

「チラチラ

」チラチラ

「~~~~~（説得お願いね）」

はア〜

零「西住、お前は戦車道がやりたくないのか？」

西住「うん……」

零「なぜ逃げる？……」

西住「え？……」

沙織「ちよつ海月！」



華「海月さん!」

零「1度負けたぐらいで戦車から逃げるのか?…違うな…お前は怖いんだ…世間から期待されてて…自分が戦車を放棄したから負けた……違うか?」

西住「!っち、違う」

零「ほんとにか?……自分でも分かってるんじゃないか?…自分ただ期待に答えられなかったら戦車道を当避けた……」

西住「!!」

沙織「海月!もうみP」

零「少し黙ってろ」

華・沙織「!!」

零「何かから逃げる事は弱者がやることだ、西住流の事を少し調べた、お前の姉さんは隊長だ、そしてお前は副隊長だった…違うか?」

西住「うん……」

零「お前は悔しくないのか?、西s「もうやめてよ!」……」

沙織「もうみぽりんは戦車やらないの!」

華「私達これで失礼します」

沙織 「行こみぼりん」

華 「海月さん…見損ないました」

沙織 「サイツテ…」

パタン

……

会長 「……………海月ちゃん…汚れ仕事をさせて…ごめん」

零 「いや……………いい」

「会長……………ダメでしたね…」

零 「いや、説得は成功だ」

「え？」

零 「西住の眼が……………何かを決心した眼だっだ」

零 「俺も失礼します」

「……………あり……………がとね」

く 帰り道く

疲れた……今帰ったら西住にばったり会うだろなあ……俺も俺で準備するか

……

俺は携帯を取り出して……ある所に電話する……

零『ロシア語・あつもしもし……』

『ロシア語・あつ？ゼロか？』

零『ああ、戦車を買いたい』

『戦車か？なんでまた？』

零『戦車道をやる事になった』

『戦車道？……戦争か？』

零『まあ、似たようなもんだ』

『ほう……で？何を買いたい？言つとくけどちゃんと金はあるだろうな？』

零『ある……あと預けたT72を港に送ってもらいたい』

『あ？、まあいいが送料は高いぞ』

零『構わない、で、戦車なんだが……』

零  
『T44を  
買いた  
い』

### 3話 『T44 買います!』

『……はっ?』

零 『えっ?』

『T44?……あれは旧式だぞ?……第二次世界大戦と現代で殺るってか?……馬鹿だろ』

零 『馬鹿って言うなよ……公式で1945年に完成もしくは試作車しか参加できないんだよ』

『ふーん』

零 『で?T44はあるのか?』

『あるっちゃあるけど……壊れてるぞ?』

零 『うーん、何が壊れてるんだ?』

『ああ……エンジンと履帯あたりだな……買うか?』

零 『じゃあ、バラバラにして……半額にしてくれ』

零 『あと部品も45年までの』

『ああ……まあいいか……で、どこに送ればいい?』

零『あー俺今学園にいるんだわ……………』

『はっ?……………学校で戦闘すんのか?』

零『あついや、空母なんだ……………学園艦……………』

『……………対空兵器は?』

零『……………多分ない……………』

『……………料金追加な……………』ピツ

零『……………マジか』

零『あつ……………T72を忘れた……………』

く翌日の車庫く

ぬいぬい……………眠い……………昨日学園艦のルートを教えてたら深夜の4時だったよお……………  
ん?何か生徒会メンバーがいるな……………よし教室に行こ

ガシ

「海月ちゃん何処に行くのかな?」

零「これはこれは会長……おはようございます」

会長「うん、おはよう」

「貴様はこつちに来い」

ぐへえ、喉を掴むなよ……

あつ

零「名前……なんですかね3人共……」

「「えっ?」「」

えっ?

く車庫く

うへえ……鉄の塊だな……動くのこれ……まあ大体分かってたけど

桃「海月、直せるか」

零「うーん、部品がイッちやってますね」

桃「なら部品を手配しよ」

零「とりあえず……洗いますかね」

零「あつ」

零「会長」

杏「ん？」

零「俺の戦車が届くんですけど…校庭を借りてもいいですかね」

杏「いいけど…お金はどうしたの？」

零「ポケツトマネーではないですけど…まあ秘密です」

杏「ふーん…いいよ」

零「ありがとうございます…あつ河嶋さん、」

桃「なんだ？」

零「こつちで部品手配したんで」

桃「なに？それは…」

杏「河嶋く西住ちゃん達が来たよ」

由子「ももちゃん、早く」

桃「今行く、海月……」

海月「ん」

桃「すまないな」

海月「うーす」

うんじや会長達は新部員を歓迎してるとこだし…俺は戦車を確認するかねん？何か…ドアを閉めやがった…嫌われてる？



沙織 「みぼりん、大丈夫？」

西住 「うん、大丈夫」

華 「私達がお守り致します」

西住 「あはは……ありがとうね」

杏 「注目ーこれより戦車道の授業をはじめよ」

「戦車は何ですか？・ティーガーですか？・パンターですか！」

杏 「うーん、なんだっけなあ」

杏 「河嶋、小山」

ガララアジャラ

「……………」

「なにこれ……」

「ボロボロ」

「……………」

華 「サビてますね」

沙織 「鉄サビだね」

「I V号戦車ですー!」

西住 「少し汚れてるけど……装甲と転輪も大丈夫かな」

ガンツ

「イッテ!」

「えっ? なになに?!」

「幽霊!」

沙織 「み、みぼりん……」

「イッテエ、狭過ぎる」

「外の空気はいいなくん? よお」

西住 「う、海月!」

沙織 「みぼりん! こっち」

華 「海月さん、なんでここに居るんですか?」

零 「なんでって俺も受けるからなんだけど」

みほ 「えっ海月くんも?」

零 「まあな」

「あれ……2年の海月先輩ですよね……」

「……なんで……やっぱり噂どうりなのかな……」

何か………1年が………ゴミを見るような眼をしてるよ……

沙織「噂って……みぼりに手を出させないよ!」

華「そうです!不潔です!」

「何かあったのかな………肉体関係?」

「えっ、警察に電話しなきゃ」

ええ………まあいいや

pirorororo

「「「「「ビクン」」」」」

零『ロシア語・もしもし?』

『ロシア語・今学園の上空にいるんだが』

零『あく許可貰ったから校庭に着陸してくれ、できるか?』

『おいおい………死んだらお前のせいだからな!』

零『へい……ちなみに何で運んでるんだ?』

『輸送ヘリだが?』

零『余裕じゃねか!』

『えっ!、日本の学校は小さいと聞いたぞ!』

零『そこまで小さくねえよ!いや小さいけど!』

『そろそろ着くわ』

はあ

「何かすんごい叫んでるね……」

「怖ーい」

「なにか聞こえませんか?外から……」

みほ「うん、なんだろう」

沙織「どんどん大きくなるよ!」

華「ヘリコプターの音ですね」

く校庭く

杏「おーデカイね」

「ロシアの輸送ヘリのmi—26・Helloです!」

詳しいな

ヘリからT44が降ろされました

杏「あっ海月ちゃん……言い忘れてたけど……特殊カーボンコーティングしてる？」

零「えっ？」

杏「えっ？」

………

零 『もしもし、特殊カーボンコーティングしてる?』

『(特殊カーボン?…複製装甲の事か?…めんどいから適当でいいや)してる』

零 「してます」

杏 「それならいいけど」

杏 「その戦車は誰が乗るの?」

零 「俺1人ですけど……」

杏 「えっ? 厳しいじゃない?」

桃 「役割は全部1人でやるのか?」

零 「まあそうですね……イラクの時もずっと一人でしたし…それに誰も俺と乗りた  
いとは思わないですよ」

杏 「………」

「おい部品をどこに運ばばいい?」

零 「その車庫で」

「了解」

零 「会長…俺の合わせて2両しかないですよ」

杏 「大丈夫、探すから」

桃「海月、料金なんだが…」

零「いいつすよ、」

桃「いや、しかし……」

杏「いいんじゃないの？」

桃「会長……」

「探すつてどういう事ですか？」

桃「ん、ああ20年前にも戦車道があつたんだ」

由子「学園艦のどこかに戦車が隠れてるの」

桃「戦車はどこかにある筈だ、いや絶対ある」

桃「明後日教官がいらつしやる前に戦車4両を探すのだ」

へえ……教官も来るんだ…

「おーいロゼ」

零「ん？なんだ…」

「ほい、レシート…」

零「サンクス……えっ？……高くね？」

「部品、戦車、お前の輸送代、燃料代、弾薬代」

零「えっ？燃料関係なくね？」

「T44の燃料だ」

零「ああ……そう」

「じゃ、俺はこれで……」

生活……厳しそう……

「あ、あの!」

零「ん?」

「このT44はどうしたんですか!」

零「買ったけど……」

誰?……

「凄いです!、触ってもいいですか?」

零「良いけど……えーと……」

「あっ私、秋山優花里と言います!」

零「海月だ、よろしく」

優花里「はい!早速触りますね!」

零「おう」

優花里「~~~~!!」ペタペタ



優花里「堪りません！、中に入ってもいいですか！」

零「いいけど、あまり触らないでよ……」

優花里「ありがとうございます！」

んーすんげえ嬉し泣きだよ……戦車を見て嬉し泣きなんて初めてだよ

うーん……流石に1人はキツいかなあ……射撃に30秒ぐらいかあ……走行射撃は……無理だな……停止して撃つか……視界も狭いし……前しか見えないし……うーん

あつ説明書だ……なにになに……

砲塔

前面120 mm、側面90 mm

後面75 mm

車体

前面90 mm、側面75 mm

後面45 mm

主砲が85mm……えっ？たつた85mm？……迫撃砲じゃん……いや違うなこれ普通なんだろ……装填は早く済みそうだな

傾斜を取れば……装甲が1.5倍ぐらいか……M1に余裕でぶち抜かれるな……

優花里「質問いいですか？」

零「んー？」

優花里「なぜ戦車道をやろうと思ったんですか？」

零「まあ……戦車が好きだからかな……」

優花里「~~~~!!」

優花里「よ、良かったらお友達になりませんか！」

零「お、おう」

戦車が好きなんだなあ

優花里「海月殿ほどの戦車が好きですか？」

零「T72だな、あれはいいゾ」

優花里「T72ですか！いいですよねあの形！」

零「おーよく分かってんじゃない」

零「今度乗せてやるぜ」

優花里「えっ?! 持つてるんですか！是非乗りたいです！」

あつ、やべ……まあいいか……

優花里「海月殿は整備とかできるんですか？」

零「できるけど……なんで？」

優花里「よかつたら私にも教えてください！」

零「おう、いいゾ」

杏「海月ちゃん、探しに行くよ」

零「うつつ」

零「また後でな」

優花里「はい！」

西住達side

沙織「んーないなよ」

華「駐車場にはないと思いますけど…」

みほりん「あはは………」

みほ「………」

沙織「みほりんはよかつたの？戦車道……」

みほ「私ね……怖くてずっと戦車から逃げてたんだ……」

華「それは仕方ないと思ひ、」

沙織「しても酷いよね!あそこまで言うなんて」

華「はい、いくら何でも酷すぎます!」

みほ「あはは……」

逃げる事は弱者か……私の事……お母さんやお姉ちゃんはどう思ってるんだろ……

沙織「みほりん大丈夫?」

華「顔色悪いですけど……」

みほ「ううん、大丈夫……2人は良かったの?戦車道」

沙織「私も戦車道をやってみたかったから」

華「私もです」

みほ「……ありがとう」

ん?後ろから気配を感じる……あつ木の影に……誰かいる……よし

みほ「あ、あの!一緒に探しませんか?」

優花里「ふえっ!」

優花里「えと、あの……よろしくお願ひしますう」

優花里「私 秋山優花里と言ひます!」

沙織「よろしくね、私 武部沙織」

華 「五十鈴華と申します」

みほ 「西住みほです」

優花里 「存じております！」

みほ 「え、うん」

優花里 「では、よろしくお願いします」ピシ

零  
「腹減つたなあ……」

## 4話『お友達?』

うーん……………なんだろうこの車両……………対空車?装甲車?偵察車?……………いや、主砲が付いてるから……………戦車……………だろうな……………にしてもなんでこんな所にあるんだ? ……錆び付いてるけど……………うんじゃあ持つて帰りますか

「あつ35 (t) です!」

ん?……………誰だ?……………ああえつと……………そう!秋山だ

優花里「海月殿!」

零「ん……………よおさつきぶりだな秋山」

「待つてー」

「待つてください」

「あはは……………」

……………困った

みほ「海月くん……………」

沙織「……………」

華「……」

優花里「あ、あれ? 皆どうしたのですか? ……」

うーんすごい睨みだ! ……どうしようこれ…

pirorrorororor♪

《もしもし? 海月ちゃん見つかった?》

零《会長……見つかりました》

杏《オーケ》

杏《あと、干し芋買って来て》

pi

……自分で買ってください……

ここはCOOLに去るぜ

みほ「う、海月くん!」

COOLにサレナカッタヨ……

零「ん?」

みほ「私ね……ずっと嫌な事から逃げてたんだ期待に答えられなくて……世間の目も怖くて……だから私はもう逃げない! 戦車道から逃げない! 戦車道から背かない! だか



ら！……だから……」

みんな？……なんでこのタイミングで？あとと言つてることがむちゃくちゃ

みほ「お友達にならないかな？」

ふむふむ……あつやめて……2人で俺を睨まないで……お願いします

零「もう逃げない？、仲間を見捨てることも出来ない奴が？また誰かが死にそうになつたらフラッグ車を放棄して助けに行くんじゃないか？そんな奴に」

みほ「どっちも見捨てない！」

零「そんなの無理だな……西住……お前は砲弾を食らつた奴を見たことあるか？」

西住「えっ」

零「お前は戦場を見たことあるか？」

零「お前は隣で仲間がくたばって逝く所を見たことあるか？」

零「お前は人を撃つ事はあるか？」

零「人は恐怖から逃げる、人は無意識に遠ざける、人は人を見捨てる、人は…誰も守れない…」

みほ「そんなところない…私は…私は…」

零「あの時助けられた」

みほ「っ!!」

零「結果的に負けた」

みほ「……」

零「1度失敗したら2度目はないんだよ…全ては結果なんだよ」

零「意味が分かるか？」

みほ「…」

零「ま、2度目がないんなら作ればいい」

みほ「作る？」

零「そうだ、腕がもげようが脚が潰れようが地面を這いつくばりながら作ればいい」

みほ「こ、怖い事言うね……」

零「俺も……ああ……俺も1度を死にかけて事あるからな」

みほ「？」

ん？……何か2人がすんごおい真顔なんだか……なんだその顔!?!…

沙織「海月！」

零「ん？」

んん？なんだ…殴られるのか

沙織「携帯貸して」

零「やだよ」

沙織「カシテ」

零「いや、だから」

沙織「カセヨ」

こっわ……怖いよ……拷問かよ

零「ん」

華「海月さん」

今度はなんだよ

華「お花は好きですか？」

花「……?……?……うーん、知らんし……あつ

零「えつと、ウオツカ」

華「ウオツカ？」

華（聞いたことないですね）

零（酒ですもん）

優花里「海月殿!戦車何が好きですか!」

零「T72」

沙織「即答!、はい、連絡先登録したから」

華「私のもお願いします」

優花里「あつ私もお願ひ致します!」

ん?……無線機?なぜに?……はあ!?!無線機型の携帯かよ!……すんげえ欲しい

ん、ん?1人は多いなえーと、西住みほ

いつの間に……

やたー連絡先が武器商人しかなかったのに3人も増えてるよ…後で消そ…

沙織「消したら…分かってるよね？」

零「oh…… YES」

うんじやあ戻りーますか

〈校庭〉

おー他にも戦車があつたか、あれ？T44はどこに……あつ落書きがあるんだけど…  
1年共か…解せぬ

うんで只今掃除中だが…なんで小山さんは水着なんだろ…胸デカイな…

ア、ア、ア、ア、ア おちねえ!!これ絶対油性だろ!、後で金を巻き上げよ…

ん?… なんか秋山がすんごい顔してる… 世界の終わりを見たみたい… よし  
やつと落とせた… ん?

秋山の顔が明るくなった…

杏「よーし、戦車を振り分けよー、どう振り分ける？」

桃「見つけた者でいいと思います」

杏「それでいいつか、西住ちゃんは4号ね」

RPGって使ってもいいんだろうか……

桃「あとは自動車部にやらせる」

へえ…整備できるのか…

桃「では解散だ」

零「うーす、俺も整備しますか」

そいや何気に戦車触るの久しぶりだな…皆が恋しいよ…

杏「海月ちゃん」

零「なんですか?」

杏「海月ちゃん、整備ができるの?」

零「できますよ、全般やってみましたから」

杏「ほほう、数時間前の人知り合い?」

零「まあ…:…:…:そうですね」

杏「次からは私に言つてよ?じゃないと自衛隊に連絡するからね?」

零「はい…:」

杏「分かればよし、じゃあねー」

零「さいなら」

俺もそろそろ帰るかな……あつ明日教官が来るんだっけ……!!……は、腹が!!と、トイ  
レ!!!

数時間後

く自宅く

おおおお……ケツが熱い……三時間ぐらいこもってしまった……疲れたよ……もう学校  
行きたくないよ……自宅警備したいよー

ピンポーン

おん?

零「はーい」

ガチャ

みほ「あつ海月くん」

パタン

………寝るか

みほ『あ、あれ?海月くーん開けてよー』  
やです、

みほ『……………』

静かになった…

p i r o p i r o p i r o

零《はい》

みほ《なんで閉めるかな?、怒らせるような事したかな?》

零《いえ、反射的に》

みほ《そう…今日ね皆でカレーを作ってみたの、でね余っちゃって…その…食べない?》

零《あー、まあうん、》

ガチャ

みほ「こ、こんばんは…」

零「ん、カレーは?」

みほ「私の部屋にあるんだ」

零「うん」

みほ「その…私の部屋で食べない?…話もしたいしさ…」



ああ…そゆことね…

零 「了解」

く西住の部屋く

みほ 「どうかかな？」

零 「普通に美味しい」

みほ 「よかった」

零 「それで話って？」

みほ 「お礼を言いたくて…」

零 「お礼？誰に？」

みほ 「海月くん」

零 「俺？なんもしてねえぞ」

にしてもうんめえな

みほ 「ううん、私を説得してくれた…武部さん達はね戦車道をしたいつて言つてたのでも私の事を気にして…」

零 「ふーん」

みほ「それにお友達ができて嬉しかった…黒森峰にはお友達が居なくて…」

零「なんで? お前副隊長じゃん」

みほ「そうだけどね、ほら家柄がね…」

ああ、確かにマフィアの娘と友達になるのに勇気があるな…ん? マフィアだっけ? …どっちでもいいや

零「まあそうだな…」

みほ「武部さん達は、気にしないって言ってくれて嬉しかった…それにあの時私を庇ってくれた…」

ああ、あん時ね…2人の目が豚を見るような目だったな

みほ「海月くんのおかげで本当のお友達になれたのだからお礼が言いたくて」

零「ふーん、まあ良かったじゃん? 友達なんて居ないから分かんけど」

みほ「え?」

零「え?」

みほ「私達お友達だよ?」

零「えっ? いつから」

みほ「連絡先を交換してから」

なに? 交換したら友達になれるの? 日本ってすげーな



零「もうお友達でいいよ」

みほ「ほ、ほんとに?」

零「兵士は嘘をつかん」

みほ「兵士?」

零「あ、いや、まあほら…戦車が好きでさあたまになりきりして遊んでんだよ…」

みほ「そ、そうなんだ…」

引くな引くな、まるで俺が友達がいるやつみてえじゃねえか…あ、ついさつきまで

居なかったわ…

零「うんじゃ明日も学校があるし、もう寝るわ、バイ」

みほ「あっうん、おやすみなさい」

パタン

みほ「……………えへへ」

何気に女子の部屋に入るの初めてだわ……どうでもいいけど

「翌日」

ぐああああ!!! うんこが止まらねえ!! くっそカレー食い過ぎた! 神よオオオオオオオ  
!!! オラに力をおおおお!! 神の力が無ければ無力だアアア! あつ、止まった……ふう……  
やはり神の力は偉大だな……そろそろ学校に行くかな

ガチャ

みほ「あつおはよう海月くん」

零 「あっうんおはよ」

みほ 「何か叫んでたけど……大丈夫?」

零 「あついやまあ……お祈りをしました」

まつじかよ壁薄すぎだろ……

みほ 「そうなんだ……一緒に行かない?」

引くな引くな……まるで俺がトイレで叫ぶ変人みたいじゃないか……変人だったわ

零 「まあ、いいぞ」

しばらく

零 「あつ」

「うう……眠い」

みほ 「あの娘……大丈夫かな? 脚がフラフラだけど……」

零 「フラフラは異常だけどな」

「あつまた会いましたな、すまないがまた頼みたい」

零 「えええええいよ」

みほ 「いいんだ……ダメって言うかと思った」

零「運ぶぐらいだからな」

もうちよいで着くけど：何か誘拐してるみたいでワクワクする

## 5話『教官が来ます!』

うんでいろいろあつたけど… ただいま校庭にいます

そいや昨日秋山と友達になつたわ… まあいいや

沙織「あつおはよう」

華「おはようございます」

優花里「おはようございます」

みほ「皆おはよう」

零「うーす」

華「教官遅いですね…」

沙織「大人のテクニクだよね」

みほ「あはは…」

ぜつたい違うと思うけど…

ん? ジェット機? んーおつでつけない輸送用機じゃん

ん!? M1!? なぜここにM1? … あれ? M1ってあんなデザインだっけ… 思い

出した… 10式だ… けど、まだ試作段階と聞いたが… あつ車を潰したあれ絶対高級



車だ…さらに踏んで行きやがったw

にしてもM1と比べるとちっさいなあ…でもなんで10式が……つとなんか自衛官が生まれてきた

「…こんにはー!」

沙織「…騙された…」

華「でも素敵な人ですね」

簡単に騙されそうだけどね…あつ目があつた……やべーよやべーよ…おいコラア! 降りろ! お前免許持つてのんか!? って言われそう何もしてないのに…喋り方がすんげ外国人っぽい! えっ? 英語? 知らない子ですね…

「あら、男子もいるのね」

零「あ、どもです」

「貴方も戦車道に興味を?」

零「そうですね…」

「…どこかで会いました?」

零「…人違いだと思いますよ」

「…そう」

「あ、私は蝶野亜美といいます、皆よろしくね!」

零「海月零です」

亜美「ええ、戦車道は初めての人が多いと聞いたけどビシビシ教えるわ」チラ

亜美「あれ？西住師範のお嬢様ではありませんか、お姉様は元気？」

みほ「えと、あの……はい……」

「西住師範って？有名なのかね？」

「さあー」

ん？口調おかしくね？

亜美「西住流はね、くくく」

ワーオ空気読もうぜー西住があああああ……にしてもすんげえ喋るなあ

沙織「はーい！教官はモテるんですか！」

亜美「え？そうねえ……分からないけど的外したことないわ！、命中率120%よ！」

絶対外してる

優花里「教官！今日はどんな練習するのでしょうか！」

亜美「そうね！本格戦闘の練習しましょうか！」

おいおい……死人出す気か……こいつらルーキーだぞ……ぜってえ前進すらできねえよ……

厳しいね！

柚「ええ！いきなりですか!？」

亜美「何事も実践よ！」

あつ教官向いてないタイプだ、例えるなら、ドーン！バーン！を教えるような奴

亜美「各自配置に着いてね」

「これどうやって動かすのー」

「分からないー」

「げっググれカス…」

みほ「皆「まず車内に入れ、そしてエンジン掛けろ、砲弾もあるか確認しろ、あと自分たちで役割決めろ、分からない事があれば秋山に聞け…こいつ、戦車のエキスパートだ」……おお…凄い…」

「分かりました」

零「秋山、西住、1年の面倒を見てやれ、それが終わったらあそこで領いてる4人組にも、西住は生徒会長達に」

零「五十鈴と武部、ホワイトボードに地図を貼ったら自分達の車両を確認しろ」

華・沙織「は、はい！」

優花里「す、凄いです…」

みほ「すごいテキパキだね…」

亜美（……凄いわね、あの男子…）

零（…やばいうんこしたい…）

零「バレー部早くしろ！」

桃「我々も乗り込みましょか」

杏「うん、」

杏「……………」登れない

……………何も見なかった

杏「河嶋、」

桃「はっ」

柚「いきなり試合なんて…」

説明してるな、教官…もう少し分かりやすく…沙織が駄々こねてるから

亜美「海月くんは……………」

零「1人で大丈夫です」

亜美「そ、そう…」

「もちろん2次元殿がコマンダーですよ！」

コマンド？、お前は最後に殺してやる…カツコイイよなあ

華「あの、これどうやって動かせば…」

みほ「まずイグニツション入れて」ヘーイ！長年待ちわびた！  
優花里「いやっふうー!!最高だぜ！」

……………お前誰だよ?……………

……………

やばい…:T72と全然違う…:

『いいか?、こいつの名前はナスルだ』T72を指す

零『ナスル?』

『勝利って意味だ』

『へっ、戦車に名前付けても意味ねえよ、ただの兵器だろ?』

『はあ…:兵器だが名前があった方がいいだろ?』

『兵器は兵器だ、名前なんていらねえよ』

『お前は酒飲んでねえでちつとは手伝え』

『へいへい…:』

『お前もどうだ?、酒飲もうぜ』

零『俺はいい…:』

『ジヨディ!!』

『ジヨディ』わかったって!、今手伝いますよ!』

零『あはは……』

う……っ……うつき……海月くん？……

零「あ、……ああ……すまんボーっとしてた……」

みほ「大丈夫？……凄い悲しい顔してたけど」

零「問題ない……なあ……戦車に名前があつたら変か？」

みほ「？」

優花里「私は良いと思います！」

華「私もいいと思います」

沙織「私もー！」

みほ「ボコはどうかかな？」

零「ボコ？」

みほ「これだよ！」つストラップ

零（……ボコボコやん、）

みほ「ボコはね！何度負けてもまた喧嘩を売るのは！」

零（……ドMやん）

みほ「あつそうだ、海月くんにもあげるよ！」

零「ゑ」

みほ「ハイ！」つストラップ

零「……」よう！オイラボコってんだ！よろしくな！

寝ている間に殺されそう……

よし、こつそりすて「海月くん？捨てようとは思ってないよね？」

零「イエエエアス！もちろん！」

みほ「もし……考えてたら……ね？」

零「ジーザス……」

亜美「そろそろ時間よ」

「「「はーい」」」

零（まじ、どうしょこれ……）

零（……今日からお前の名はボコだ……）T44触れる

あいつらに笑われそうだ……

さて……行きますか

つて4号……大丈夫かよ……いつか戦闘しないでやられるぞ

「わかったー、ギアをいれるんだって」

「ギア？」

「会長、我々も行きましょ」

「逝くぜよー」

「ど根性おおおおおお!!」

ん?…まあいいや

沙織「ちよ!左!左に!!イテツ」

沙織「左って言ったのに…」

華「よく聞こえませんか!」

零《左だつてよ》

沙織「わあ!ビックリした…」

華「すみません、エンジンの音が大きくて聞こえませんでした」

みほ「その時は脚で肩につついて」

沙織「脚?」

みほ「進む方向に肩をつつくの」

沙織「その事できないよ!」

華「思っきりやっちゃってください」

沙織「わかった、じゃあ左!!」ドス

華「ウグツ」

《ガキーン》



ん？

零《大丈夫か？》

華《だ、大丈夫です…》

沙織《ご、ごめん！》

みほ《あはは……》

零《何があつたんだ？》

みほ《沙織さんが華さんに方向を伝えようとして肩を思いつき蹴っちゃって…》

あー、それは痛い

零《なら、脚をずつと肩に乗せるといいぞ》

零《方向を伝える時は肩を軽くつつけばいい》

沙織《海月、アドバイスありがとう！》

華《優しくお願いします…》

つつても俺も視界が悪い

とりあえず紐でアクセルを固定しとくか

零「ふうーよく見えるぜ」キューポラから頭を出してゾ

沙織「う、海月?!、え、えっ?!、誰が運転してるの!?!」

零「紐で固定しました」

沙織「あ、危ないよ!」

零「モ、ン、ダ、イ、ナ、イ」

沙織「あるよ!」

零「銃弾が飛び交うよりは安全だ」

沙織「そ、そうなの?」

零「そうだよ!」

零「まあ、黒塗りの高級車にぶつかったからやばいけど…」

く 訓練く

亜美《皆スタート時点に着いたようだね》

亜美《ルールは全車両走行不能にする、バンバン撃って、兎に角撃ちまくればいいの》  
杏《いや、随分とざっくりですね》

柚《会長も人の事も言えませんがね…》

零《まあ、全員が敵って事だな》

亜美《戦車道は礼から始まって、礼で終わるの》

亜美《一同礼!》(・ω・) キリッ

《よろしくお願いしますー!!》

亜美 《それでは試合開始!》

殺りますか…

さーて、俺は狙撃ポイントに……ん?

亜美 《………》

零 《どうしました?》

亜美 《全力でお願いしますね………死神さん》

了解ですつ……教官殿

## 6話『本気』

人は……人はなぜ罪を犯すのか……人はなぜ人を殺せるのか……人は……なぜ弱い者いじめをするのか……そんなの簡単な事だ……人は誰よりも上に立ちたい生き物だ……その為ならなんでもする、罪もいじめも殺しもなんでもする……それが人間だ……人はなんの為に生まれたか……それは強者に仕える為だ……いわば……奴隷だ人間は腐るほどいる……1人が死のうが強者には関係ない、使えるかどうかだ……例えるなら女王蜂と働き蜂だ……働き蜂は弱者だ……女王蜂は強者だ……そして……俺は……お……い……俺は……おい……お……お……きろ……口……ぜ……俺は……なんだ？

「おい！ロゼ！起きろ！」

ロゼ「つああ……悪い寝てた……今どの辺だ……」

「もう少し前線だ……それより大丈夫か？」

ロゼ「何が？……」

「こっちは大声で呼んでるのに全然起きねえからよ」

ロゼ「そんなにか？……疲れが溜まってるだろ……」

「ちゃんと抜いてるか？」ニヤニヤ

ロゼ「やめろよ…珍しく今日は酒飲まねえんだな…ジヨデイ…」

ジヨデイ「今日はそんな気分じゃねえ…それよりも変じゃねえか?、いきなり偵察つて…米軍は撤退したはずだか…」

ロゼ「さあな…ただ分かるのは普通じゃないって事だ」

ロゼ「そいや、ルーは?」

ジヨデイ「あいつはナスルでケツにくっ付いてるよ」

ジヨデイ《ルー、気分はどうだ》

ルー《暑くて死にそうだ…》

ジヨデイ《ちゃんと援護してくれよ》

ルー《分かってるよ》

ロゼ《そつちに予備のヘルメットあるか?》

ルー《ああ…あ r》

ズツヒュー

ジヨデイ《聞こえたか…迫撃砲だ…》

ロゼ《………つ!……こつちに来るぞ!!…伏せ r》

ズツドーン

ロゼ「ああ、…」耳鳴り



零 「うーん…疲れが溜まったのか…」ハッチから顔を出す  
零 「…何で…あいつら橋の上にいるんだ？」

零 「うーん…囲まれてるな…ま、このままやられたら助かるけど…ま、撃破数稼ぐか」  
零 「距離は2kmか…砲身を上に向けて…よし…てっ！」

4号 side

沙織 「みほりん、どうしよ!? 囲まれちゃったよ！」

沙織 「華! 起きてよ！」

みほ 「沙織さん、落ち着いてください！」

優花里 「西住殿! それから砲弾が来ます！」

みほ 「え?」

ズンッ

『いったーい!』

『なにになに!』

『何かに当たった!』

みほ 「なにが…起こったの…?」



優花里 「…わ、私にも…分かりません」

『捉えたぜよ』

『よーし！つて！』

砲塔の右を通過

『外れたぜよ』

『どんまい』

ズンッ

『エンジンは燃えてるう！』

『消せ！消して！』

みほ 「とりあえず橋から出ないと！」

沙織 「華起きてよオウ」

みほ （…ここは私が…）

麻子 「うるさい」

沙織 「ま、麻子!?!」

麻子 「ここは？…どこ?」

優花里 「戦車の中ですよ」

麻子 「ふーん…?」

沙織「そんな事より動かないと！」

グラッ

みほ「あれ？、動いてる」

沙織「ん？麻子!?、運転できたの？」

麻子「今覚えた」

沙織「流石」

優花里「砲弾来ます！」

みほ「麻子さん！バツクしてください！」

麻子「うむ」

ヒュッ

優花里「あ、危なかったですね！」

沙織「そうだね!？」

華「う、うう」

みほ「あつ華、大丈夫？」

華「え、ええ少し頭がクラクラします…」

華「あれ…私…運転…」

みほ「華さん目が覚めたんですね！覚めたばかりですみませんが、砲手お願いしても

いいですか？」

華「ええ……と……よく分かりませんが……分りました！」

零 side

零「避けた？……避けられるはずがない……見えない所から落ちてるのに……砲撃音で判断か？……すると秋山か……厄介だな……移動しないと……」

零（……コーティングってすげえな……あの砲塔なしの戦車の乗員生きてる……処刑される覚悟で撃つたけどそんな心配する必要なかったな……とりあえず森の中に移動するか）

霊（T44に初めて乗ってけど砲塔旋回遅いな……けど足回りはいいな……）

38 (t) side

杏「凄いね……海月ちゃん……」

桃「そうですね……これなら勝てるかもしれないね……」

杏「……」

桃「……？……どうしました？会長」

杏「んー？これでいいのかなって…海月ちゃんを騙すようなことをして…」

桃「会長…話してみますか？」

杏「そうだね…終わったら話そうつか」

柚子「私もそれがいいと思います」

杏「河島くぜんしん」

ズンツ

「…えっ？」

T44side

零（…撃ってしまった…まっいつか）

四号side

沙織「うーん、どこにもいないよ…」

優花里「音的にこつちだと思っうんですけど…」

麻子「お腹すいた」

華「麻子さん、後で食堂に行きましよう」

麻子「うむ」

みほ「残るは私達みたいですね」

沙織「ええ!?!早すぎない?」

優花里「それほど海月殿は凄いのですよ!!」

みほ「どこで熟練したんだろ…」

優花里「外国とかですね?」

みほ「外国?」

優花里「はい、数年前にイ〇クで内戦がありました、話では一人の日本人の少年が参加したとか」

みほ（内戦…そいえば海月君、兵士は嘘付かないとか言ってたっけ…まさかね）  
ヒュンッ

優花里「砲弾です!!正面からです!」

みほ「麻子さん!!バツクしてください!」

麻子「分かった」

優花里「T44です!、こつちに走ってきます!!かなりのスピードで!」

みほ「華さん、履帯を狙ってください!」

T44 急停止

みほ 「急停止!？」

優花里 「回避しましたよ! 凄いです!!」

沙織 「みほりん!!、こっち狙ってるよ!、麻子!？」

麻子 「足がハマってる」

みほ 「麻子さん、車体を傾けてください」

ヒュンツ! ブツン!

沙織 「跳ね返った!？」

みほ 「前進してください、このまま相手の側面取ってください」

沙織 「それじゃ撃たれちゃうよ?」

みほ 「大丈夫です、装填まで時間かかるので…え?…」

零 「…ブーン」

ズンツ

四号 「」 シュ白旗

T44 side

## M3 ( ) 白旗

零（うっし、2両殺った、残りは西住達か…さつきは避けられたから接近して0距離で撃つか…）

しばらく走ると停止してる4号を発見した

零（なにしてんだ？あいつら…装填完了…履帯の付近に…）

ズンツ

零（よし…慌ててバックしようとする…そして…砲弾で地面に穴が空いたところにハマる）

装填して、一気に加速

零（砲弾がこっちにくる）急停止

零（あぶねえええ、これで終わりだ）

ズンツ

ズウツ

零（なに!?!、当たる着前で車体を傾きやがった!、やるな）

零（こっちに向かつてるな、ああ側面ね甘いね）

砲塔を横に向ける

零（装填に時間かかると思ったんだろな）

零（あとは前進！…よし横についた！）

零「…ブーン」

試合終了



亜美「お疲れ様」

零「ん、疲れました」

亜美「どうだった？戦車道」

零「酷すぎます、特に四号は化け物ですよ？なんですかあの機動性」

亜美「それが戦車道よ！」

零「おっそうですね！」

亜美「どう？今の生活は」

零「そこそこいいですよ、安心して寝れますし」

零（女子校じゃなかったらなあ）

亜美「良かったわ…にしても今朝私を他人みたいに見てたわね？」

零「さあ？、俺はただ「あっやっペイカれた野郎だ」と思いましたけど？」

亜美「私は女よ!？」

零「同じですよ」

零「そもそも1日しか世話になってませんし」

亜美「私の中では1日＝1ヶ月よ！」

零「そっすか」

零「そろそろ戻りますね」

亜美「今度ご飯でも食べましょ！」  
零「了解です」

## 7話 『練習試合の為の練習』

「海月ちゃん、お疲れ〜」

零 「会長もお疲れ様です」

杏 「今度の日曜日に練習試合があるんだよね〜」

零 「練習試合？」

桃 「そうだ、貴様にも参加してもらおう」

零 「まあ：それはいいですけど：この艦に他に学校ありましたっけ？」

桃 「別の学園艦だ」

零 「へえー他にもあつたんですね」

零 「どういう学校ですか？」

桃 「聖グロリアーナ女学院、主に英国上流階級風の作法と格式を重んじてる英国学校  
だつとブログに書いてある」

零 「へえーじゃあ戦車はセンチュリオンかチャレンジャーですかね？」

桃 「惜しいな、チャーチルmk・VIIとマチルダⅡだ」

零 （知らねえー）

桃「正面が100mmだ」

零「え?…それだけ?」

桃「…すまん…これ以上ネットに情報がないのだ」

…よし…秋山に頼るか…

零「じゃあ…自分に行くので」

杏「海月ちゃん」

零「ん?」

杏「人生で1度にしかない仕事があつたら…海月ちゃんはやる?」

零「そうですね…報酬次第ですね…自分は報酬次第でやりますよ…例え利用されよう

が…」

杏「…貴方に頼みたい仕事があります…大会で勝ち取りたいので貴方の人生一部を頂

きたい、お願いします」

零「報酬はなんですか?」

杏「私の人生」

零「いや、いいつす」

杏「(・ω・)」

零 「ふう…じゃあ…報酬は…今度飯でも食べに行きましょう」

杏 「いいね」

杏 「そっち持ちね」

零 「うえっ?!、そりゃあないですよ！」

桃 「海月、会長の冗談だ」

零 「やりますねえ！」

零 「では…」

杏 「…海月ちゃん…ありがとね…」

零 「…」

ウンコ：したいなあ…

みほ達 side

沙織 「んっ！なんか告白されるよりドキドキしたー」

華 「された事ありましたっけ？」

沙織 「む、お父さんはいつも私の事大好きだって言ってるもん！」？（。、H、。）？

プンスカ！

みほ 「良いお父さんだね」

華 「最初はどうかと思いましたがけど凄くワクワクしました」

優花里 「はい！大変充実してました！あと海月殿が凄かったです！当たる直前で避け

たんですよ！凄いです！」

沙織 「それ！海月はとこかで戦車道してたのかな？」

華 「んー？あまり海月さんの事知りませんね…確か私達と同じで入学ですもんね…」

沙織 「でも評判は良くなかったよね…」

みほ「え？なんで？」

沙織「ほら…うちは元は女子高じゃん？」

みほ「そうなの？」

沙織「うん…有りもしない事が噂になったり…」

みほ「あ……」

優花里「えと…く、暗い話は無しにしましょう！」

沙織「えつと、し、車長はやっぱりみぼりんだよね」

みほ「へ？」

華「私達ではやはり戦車の事はよく分かりませんし…」

優花里「西住殿は頼りになりますし！」

みほ「え、わ、私が!？」

みほ「私なんか全然頼りなんかないよ」

華「いえいえとつても頼りです、よろしくお願いします」

沙織「ヨロシク!!Σ（>ヮ<）ゞ」

優花里「よろしくお願い致します」

みほ「…はいっ！こちらこそよろしくお願いします!!…はう…」

零 s i d e

うおおおおお!!!!

出る!...出る!体の一部がでる!...フツ!...ふう...

ギユルルル

っ?!...うおおおおお!!!神の力がなければ無力だ!、ウラアアアア!!全て絞り出す!  
ぬおおおおお!!、っ!ふう...

ギユルルル

う!、グオオオオオオオオオオ!!

スタアアアアアク!!!、

コチラウンコこれより反撃スル!

グオオオオオオオオオオ!!穴が!穴が!!イッテエエア!!!これはデカイ!!

p i r r o r r o r r o

零「もしもし!?!」

みほ達 s i d e



華「他はどうします?」

沙織「私は何が向いてるかな」

みほ「誰とも話せるから通信手はどうでしょう?」

沙織「それいいかも!メール打つの早いし!」

華「関係ないと思いますけど…」

華「私砲手やつてもいいですか?」

みほ「お願いできますか?」

華「はい!」

優花「じゃあ私が装填手やります!」

サバー(、ω☒)

沙織「麻子ー運転手お願い」

麻子「ん?分かった」

沙織「え?てつきりやだって言うかと思っただのに…」

麻子「海月さんもいるんだろ?」

華「はい、そうですよ」

麻子「じゃあやる」

沙織「てか麻子って海月の事知ってたんだ」

麻子「今朝学校まで運んでもらった」

沙織「そうなんだ」

麻子「それに借りがある」

沙織「借り？なんの？」

麻子「爆睡方法」(・ω・)ゞ

優花里「はう…」顔真っ赤

みほ「ん？わあ！優花里さんの顔が真っ赤！」

華「のぼせちゃってみたいですね」

華「そろそろ上がりましょうか」

沙織「帰りにあそこに行きなきゃ！」

みほ「？」

くデパート

沙織「せっかくだから海月も呼ぼう」ピッ

p i r o r o r o r o

沙織「あつもしもし？」

零 《もしもし!?》

沙織 《ど、どうしたの? そんな大声で》

零 《な、なんでもない!》

沙織 《今デパートにいるたんだけど海月はどこ?》

零 《デパートのトイレだ》

沙織 《何してるの?》

零 《後悔をしている…昨日何故ラーメンに大量の辛子を入れたのか…美味かったけど

…》

沙織 《…あ…そう》

零 《で? 要件は?》

沙織 《…買い物するんだけど海月も一緒に買い物しない?》

零 《うーん…そうだな…!》

沙織 《どうしたの?》

零 《いや…! なんでもない…!》

零 《5分待ってくれ》

沙織 《分かった》

く5分後く

零「Hey!」

優花里「Hey!」ハイタッチ

沙織「なに?そのノリ…」

零「なんとなく、うんで何をかうんだ?」

沙織「戦車の乗り心地を良くしたいからクッションとかかうかな」

戦車に乗り心地なんてあるのか…

優花里「私のはてつきり戦車道シヨップかと思いました…」

みほ「く」

華「く」

沙織「く」

優花里「…」

ん?わあ!なにその顔…どんだけ戦車が好きなんだよ…よし…T72のプラモをプレセントしよう↑(T72が好き過ぎる)

く翌日く

…なんかカラフルな戦車が止まってるゾ！

俺も色替えすれば良かったかな…↑（真っ白な塗装）

にしても凄くない？…4号の車内…秋山の顔真っ青だよ…

ん？…あ、あの子は…フラフラの子だ…あれ？居たっけ…

零「よう」

麻子「どうも」

零「保健室でよく眠れたか？」

麻子「お陰様で」

零「お前もここだったんだな」

麻子「とって昨日からだけだな」

零「そうか、お前の役割なんだ？」

麻子「運転手」

零「…そうか」

え？マシで？じゃあなに？昨日避けたって…え？凄くない？すんげえくたばれそうな顔してるのに…あれかハンドル握ったら人格が変わるやつか…納得

麻子「海月さんはどの戦車？」

零「あれ」T44

麻子「じゃあ昨日のは……」

零「俺だな」

麻子「そうか……凄いな」

零「だろお？」

桃「おーいやるぞー」

零「はーい、(何を?)」

く練習く

ダメだこりゃ……皆知識無き過ぎて戦力にならん……使いるとしたら……4号と砲塔なし  
か……

零《砲塔なしの砲手誰だ?》

左衛門佐《私だ》

零《的に何発当たった?》

左衛門佐《全弾外れ》

ダメやん……

左衛門佐《距離が遠くて当たらない》

零《狙って撃つんじゃない、感で当てるんだ》

左衛門佐《分かった》

左衛門佐《当たらない…》

零《そうか、まあ頑張れ》

すまぬ、俺は標準器の正しい使い方知らないんだ…

零《西住》

みほ《なにかな？》

零《砲塔なしに標準器の正しい使い方を教えてやってくれ》

みほ《うん、分かった》

うーん…あのピンク車すんげえ目立つな…

零《ピンク車》

ピンク車《…》

ん？

ピンク車《…ヒソヒソ》

零《ピンク車？おーい…》

あれ？…しゃあねえ直接言いに行くか

梓《あ、あの一》

零 《ん？おう、居たんか》

零 《役割は？》

梓 《車長です、何か御用ですか？》

零 《撃ち方分かるか？》

梓 《は、はい少しは…》

零 《ん、じゃあ分からないことがあつたら》

零 《秋山か西住に聞いてくれ》

梓 《先輩は教えてれないのですか…》

零 《ぶっちゃけ、ソ連車しか知らないんだ 悪いな》

梓 《そうですか》

零 《あつあつたわ…》

梓 《？》

零 《砲手に言ってくれ、『撃つ時は全てを無にしろ』って》

梓 《分かりました》

く練習終了く



う、うおおう、腕が…痛い流石に一人で全部やるのは疲れる…自動装填装置付けた  
い…

桃「今日の訓練ご苦労であった、急であるが今度の日曜日練習試合を行う事になった」

桃「相手は聖グロリアーナ女学院」

そいや日曜日にあつたな

優花里「……」

みほ「……」

沙織「どうしたの？」

優花里「聖グロリアーナ女学院は全国大会で準優勝した事もある強豪です」

華「準優勝……」

準優勝……？へえー凄かったのか……

桃「日曜は朝の6時に集合」

麻子「…海月さん……」

零「ん？」

麻子「辞めてもいいか」

零「え？、いいんじゃない？……てか何が……」

麻子「戦車道」

華「もうですか!？」

沙織「あー麻子は朝が弱いんだよ」

麻子「海月さんには借りがあるけど朝なら話は別」

零「借り…?」

麻子「では」

みほ「待つてくだされ!」

だされ?

優花里「モーニングコールさせて頂きます!」

華「家までお迎えに行きますから!」

麻子「人間が6時に起きれるか!」

起きれるだろ…俺も人の事言えないけど

沙織「麻子が居なくなったら誰かに運転するの!?!、それにいいの単位!」

単位足りなかったのか…そりゃあ眠くても行く訳だ

沙織「それにちゃんと卒業出来ないとおばあちゃんがめちやくちや怒るよ!?!」

麻子「おばあ…」ビグッ

おばあちゃん子かな?

零「なんなら俺が担いで行こうか?」

麻子「…起きれない」

零「じゃあ、俺ん家に泊まって翌日担ぐつてのはどうよ」

沙織「海月!?、女の子を家に連れ込むのはダメだよ!」

みほ「そ、そうだよ!」

華「私もそう思います!」

零「え?え?な、なに?」

零「俺はただ泊まるだけだ?」

沙織「そういう問題じゃないの!」

沙織「異性の家に泊まるのは恋人になつてからだよ!」

零「ええ…別によくね?…やるわけじゃないんだから」

沙織「や、やる!?!?!」

みほ「ちよ!海月くん!?!?!」

華「!?!?!」

優花里「?」イマイチよく分かつてない

沙織「と、とにかくダメ!」

零「分かつた」

零「じゃあ白燐弾をお届けいたします」

優花里「し、死んでしまいます！」

麻子「どうでもいいが帰りたい…」

## やべ、順番間違えた

杏「海月ちゃん、お疲れ〜」

零「会長もお疲れ様です」

杏「今度の日曜日に練習試合があるんだよね〜」

零「練習試合？」

桃「そうだ、貴様にも参加してもらおう」

零「まあ：それはいいですけど：この艦に他に学校ありましたっけ？」

桃「別の学園艦だ」

零「へえー他にもあつたんですね」

零「どういう学校ですか？」

桃「聖グロリアーナ女学院、主に英国上流階級風の作法と格式を重んじてる英国学校  
だつとブログに書いてある」

零「へえーじゃあ戦車はセンチュリオンかチャレンジャーですかね？」

桃「惜しいな、チャーチルmk・VIIとマチルダIIだ」

零（知らねえー）

桃「正面が100mmだ」

零「え?…それだけ?」

桃「…すまん…これ以上ネットに情報がないのだ」

…よし…秋山に頼るか…

零「じゃあ…自分に行くので」

杏「海月ちゃん」

零「ん?」

杏「人生で1度にしかない仕事があつたら…海月ちゃんはやる?」

零「そうですね…報酬次第ですね…自分は報酬次第でやりますよ…例え利用されよう

が…」

杏「…貴方に頼みたい仕事があります…大会で勝ち取りたいので貴方の人生一部を頂

きたい、お願いします」

「」「頭下げ

零「報酬はなんですか?」

杏「私の人生」

零「いや、いいつす」

杏「(・ω・)」

零 「ふう…じゃあ…報酬は…今度飯でも食べに行きましょう」

杏 「いいね」

杏 「そっち持ちね」

零 「うえっ!?!、そりゃあないですよ!」

桃 「海月、会長の冗談だ」

零 「やりますねえ!」

零 「では…」

杏 「…海月ちゃん…ありがとね…」

零 「…」

ウンコ…したいなあ…

「海月殿ー!」

零「おん?」

優花里「今から皆さんとカフェに行くんですけど一緒に来ませんか?」

零「うーん、秋山の事だから戦車のカフェとかな?」

秋山「よく分かりましたね!」

あ、合ってた…腹が減ったしなにか食うかな

零「んじやあ行く」

秋山「はい!行きましょう!」

元気がいいな

く戦車カフェルクレールく



秋山「ポチツ！」

m9（。D。）ドーン！

「「おおー！」」

店員「ご注文決まりましたか？」

華「ケーキセットでチョコレートケーキ2つと苺タルト、レモンパイにゆーニユーヨークチーズケーキ一つづつお願いします」

入浴ケーキ！

華「海月さんは？」

零「ん？じゃあ…苺ケーキの6号のホール、お願いします」

「「ホール！」」

華「あら、6号だけで良いのですか？」

零「うん」

沙織「いやいや、流石にホールは無理だと思うよ」

店員「いえ！ご注文頂けます！」

沙織「嘘ー!？」

みほ「アハハ…海月くんそんなにお腹が空いてるの？」

零「え？、普通だろ」

沙織 「普通じゃないよ！、物凄いカロリーだよ!!」

優花里 「海月殿は普段どのくらい食べるのですか？」

零 「ん？朝袋麺2つ、昼米2合、夜米2合半」↑リアルの話

「「フアツ!」」

店員 「やりますねえ!!」

「見ろよ見ろよ! KMR!」

「このケーキ美味そうですね!」

「いいゾ!これ!」

「じゃけん食べましょねえ!」

「おっそうだな」

なんであの3人組は裸なんだ？

なんで店員は物凄い写メしてんだ？

沙織 「よく太らなかつたね」

零 「体質」

沙織 「う、羨ましい!」

優花里 「でも流石は海月殿です」

なにが流石なんだ？

華「それでお願ひします」

店員「承りました！少々お待ちください」

沙織「ゆかりん、このボタン主砲の音になつてゐるんだ」

優花里「この音は90式ですね」

やはりか…音で戦車が分かるとかバケモンだろ…

優花里「あ！T44の砲撃音最高でした！」

…やべえな、砲撃音で種類まで分かるのか…何この子むっちゃ欲しい  
ブウウウン！（。D。）

■ | C ( . ∇ . ) ∼ ガツ☆、D ) ノ

沙織「はあつなにこれ？」

優花里「これ、ドラゴンワゴンですよ」

みほ「可愛い！」

可愛いんか…

つかなにこれ、ケーキ凄っ

華「ケーキも可愛いです」

それはなんとなく分かる

みほ「…ごめんね…1回戦から強いところに当たっちゃって」

## 8話『FBIだ!』

ああ……寒い……何があつたんだっけ……ああそうだった……皆死んだ……残酷にも死んだ……原因は……ああ……へりだ……

ロゼ「う……ああ痛てえ……クツ……ソ……肩があがらねえ……」起き上がる

ロゼ「ナスルは……ひでえ……砲身が折れてる……」車内に入る

ロゼ「……ルー……おい……生きてるか……」

ルー「」

ロゼ「そうか……」外に出る

ロゼ「……ジヨディ……」

ロゼ「…………」

ジヨディ「」下半身が無い

ロゼ「…………」

無線「」

ロゼ「……あーこちら偵察隊……誰か返事してくれ」

無線「」

ロゼ「誰か…居ないのか…頼む…応答してくれ…」

無線「」

ロゼ「…はあ…」

無線「…ここ…ここ…か…き」

ロゼ「！」

無線「…ここ…き…える…か」

ロゼ「こちら偵察隊！」

無線「西…63キロ…先に…市街地…がある…赤い…旗が…」

ロゼ「もう一度頼む、よく聞こえない！」

無線「」

ロゼ「あ…ああ…西…西…60キロ…確か…ゲリラの集団が居たはずだ…」

ロゼ「…賭けるしかない…」

ロゼ「…」振り向く

ルー「」

ジョディ「」

ロゼ「じゃあな…」

零（……ひでえ作戦だな）

桃「海月はどう思う？」

零「集中砲火はキツイと思いますよ」

零「まだ皆、満足に撃てないかと」

桃「ふむ」

典子「そこはド根性です！」

零（こいつ、やべえ匂いがする…）

零「それに被弾したとしても対したダメージは受けないかと」

梓「え？何ですか？」

零「うーん、じゃあM3の主砲は75mmだ、対して相手の車両の上面は100mm

だ、傾斜取ればそれ以上、後は弾の問題」

梓「へえー勉強になります」

零「4号でもキツイだろ、そうだろ西住」

みほ「うーん…無理かな…」

杏「海月ちゃんの戦車で撃破すればいいんじゃない？」

零「確かに殺れますけど…固定砲になってしまいます」

杏「じゃあ手の空いてる子を」

零「それは…厳しいですね…」

杏「え、なんで？」

零「T44のマニユアルは全部ロシア語なんですよ、覚えるのに時間が掛かります、それに自車に慣れてもらわないと」

みほ「あの…いいですか？」

桃「ん？なんだ」

みほ「その作戦は…失敗かと…」

桃「む？何故だ」

みほ「相手側はこちらが集中砲火を想定していると思います…裏をかかれて逆包围されると思います」

零（ん、確かに…けどそんなやすやすと進撃…あ、貫通しないんだっつた）

桃「むむむ…なんとかならんのか西住」

みほ「えーと…」

零「フラッグ戦だよな？なら、全車両やる必要は無い…」

みほ「うん、けどフラッグ車を撃破しないと…」

零「俺に囲わせてくれないか？」

桃「?、それは失敗…」

零「そうじゃない」紙に書く

T44 逃げるじやろ? 相手が何両追うかわからんけど追うだろ? 側面は脆いじやろ?  
?で包围するじやろ?

味方

味方

T44

相手

相手

ウホツ掘られる(☒ω☒)

味方

味方

零(あれ?矛盾してね?)

MUR(そうだよ)便乗

零「つて感じでどうですかね?、幸いT44の小回りはいいので」

杏「うん、いいねえそれで行こう!」

零「あ、うん」

杏「隊長は海月ちゃんで」



零 「いや、ここは西住に任せたらどうです？、俺じや務まらないですよ」

杏 「そうかな？…西住ちゃんお願いできるよね？」

零 (否定権ねえじゃねえか)

西住 「は、はい！」

梓 「先輩応援してます！」

零 (お前もでるんだゾ？)

杏 「せっかくだし…負けたらあんこ踊りね」

「「!?!」」

零 (男で良かった…)

みほ 「？」

くくく

沙織 「あんこう踊り!?!」

沙織 「い、いや！お嫁に行けなくなっちゃう！」

優花里 「さ、晒し者に…」

華 「死ぬまで言われ続けます…」

みほ「そ、そんなに？」

零「つまホ

みほ「……………あはは…」

沙織「てか、海月のせいじゃん！」

零「……………お、俺じゃないよ？」

沙織「もう！これでお嫁に行けなくなったら海月に貰ってもらおうよ！」

零「えええ！いいよ」

沙織「いいの!？」

零「まあ、毎日がハラハラ死と隣り合わせキドキの夫婦生活だけど」

沙織「ハラハラキドキ!?!?／／」

零「てか勝てばいいんだよ」

沙織「そ、そうだよね！勝てばいい話だよね！」

華「負けたらあんこう踊り」ボソツ

優花里「負けても私は西住殿と踊ります！」

沙織「わ、私も！」

華「はい、1人だけ恥ずかし思いはさせません」

零（いい奴らだな）

みほ「み、みんな!…ありがとう!」

沙織「海月もだよ」ガシ

優花里「私たち同じチームです!」ガシ

華「はい、そうですね?海月さん…」ガシ

零「あ、あはは…なんでハイライトがないんだあ?、おかしいな…さつきまで仕事してたのに…に、西住いゝ助けてえゝ」

みほ「……………」プイツ

零「アハツ☆!」

く翌日・マコンチゝ

ガラツ

零「チワツアアアス!、白燐弾のお届けもデース!、命か心臓をくださいーい!」

麻子「う、うるさい…」

零「ほら、麻子起きろ!」

麻子「ううつ…眠い…」

零「行こうぜ!、ホラホラここにおにぎりがアルゾ!」



零 《ホラーでございます》

沙織 《あー麻子は怖いのは苦手なんだよ》

零 《ほう…いい事聞いた！》

沙織 《何をする気!、てかなんかテンションおかしくない?》

零 《いえいえ、》

沙織 《ほ、ほんと?》

零 《イエエエアス!》

沙織 《嘘!絶対テンションが上がってるよ!》

沙織 《とりあえずそっちに行くから待ってて》ピッ

零 「よし、これで応援が来る、準備するか」

く数分後く

沙織 「海月、来たよく」

沙織 「あれ?海月?」

麻子 「うう…」

沙織 「あ、麻子起きた?海月知らない?」

麻子「知らない」

バタツ

??? 2 「警察だ!手を挙げる!」

「!?」

??? 1 「立て!」

「は、はい!」ピタッ

??? 1 「荷物を確保!」

??? 2 「了解です!」

ドォーン!

「「っ!」」

4号「パカ

みほ「すみません!空砲です!」

??? 「「ビックリした」バサッ

沙織「ゆかりん!?!と海月」

零「あ、俺はついでなのね」

沙織「てか、なにその格好…」

優花里「FPSの特殊部隊です！」

沙織「何してるの…」

零「ドツキリだ」

優花里「とても楽しかったです！」

みほ「……………私…いらなかった？」

優花里「いえ！西住殿のお掛けで目が覚めました！」

沙織「う、うん！…ビックリしたけど」

零「つか、あまり時間がないゾ！」

沙織「ほんとだ！」

みほ「皆、4号に乗って」

零「よし、麻子行くぞ」

麻子「おんぶ」

零「ええ」

沙織「ほら、行くよ」

優花里「荷物は私が持ちます」

零「しゃあねえな、」前屈み

零「ほら」

麻子「ん」

零「よし、乗るぞ」

く車内く

華「おはようございます」

沙織「おはようー」

優花里「おはようございます!」

零（座る所ねえな）

零「麻子、俺の脚の間に座ってくれ」

麻子「分かった」

華「ま、まあ、積極的／＼」

沙織「恋人のやる事じゃん!／＼」

みほ「海月くん、手馴れてるね／＼」

零「ん?、まあ…座る所なかったからな」

みほ「海月くんは恥ずかしいの?」

零「全然」



沙織「普通はそんな事しないよ、それよりはいい！おにぎりとお茶」

麻子「ん」

沙織「歯磨きも！」

麻子「ん」

沙織「はい、制服に着替える」

麻子「ん」

みほ「海月くん見たらダメだよ！」

沙織「あ、そうだよ！」

みほ「優花里さん海月くんの目を隠してください！」

優花里「はい！…はい？」

優花里（隠す？…目を抉り出す!?）

優花里「で、出来ませ！」

沙織「え!?!、ゆかりん！麻子の裸見られちゃうよ！」

優花里「海月殿の目を抉るなんて私には出来ません！」

みほ「そうじゃないよ！」

零（早く着替えねえかな…）

## 9話『大洗町』

（港）

零「全然進まねえな」

沙織「皆、大洗町久しぶりだからね」

零「にして多すぎてだろ、」

零「てか、戦車で降りるって危なくないか？」

零「普通に車が潰れるぞ」

みほ「そこは腕かな」

零（俺一人なんだよ、視界が狭いんだよ）

零（やっぱり1年に覚えさせればよかった…）

沙織「私、アウトレットで買い物したいなー♪」

華「試合が終わってからですな」

沙織「えー、昔は陸に学校があつたんでしょ？…」

零（今でもあるけどな…爆撃で崩壊してるけど）

華「海月さんは出身どこですか？」

零「俺?……あー…ジャングル」

沙織「ジャングル!」

華「どういう場所なんですか?」

零(知らん)

零「自然がいつぱいで…野生の動物が居て…川があつて…まあ…そんな所」

華「まあ、いい所なんですわね」

零「そ、そうやな」

沙織「いやいや!おかしいでしょ!」

零「うるさいぞ、眉毛」

沙織「眉毛っ!」

みほ「……」

華「西住さんはまだ大洗町歩いた事ないんですよね」

みほ「あ、うん」

沙織「後で案内するわね」

零(そいや俺も大洗町歩いた事ねえな)

「全然進まないゾ」

「まっ多少はね?」

「皆降りてますからね」

ゴオンッ

零「やべ」

「チツ降りろゴラァ！」

T44」

「……………」車に戻る

横からスーッと学園艦

零・沙織「デカっ！」

華「あれが聖グロリアーナ女学院の戦車ですか？」

みほ「うん」

零「秋山、あの戦車の情報くれ」

優花里「はい、チャーチルVII 速度 不明キロ（改造で測定不能）、76mm、後で紅茶が作れます！、もう少し具体的に説明しましょうか？」

零「いや、十分」

零「次にあの茶色の奴は？」

優花里「あれはマチルダですね、チャーチルと同じく速度は不明 装甲が全体的に75mm 主砲が40mm そして紅茶が作れます！」

零（紅茶好き過ぎだろ…、とりまマチルダは他の奴でもやれるか…？）

零「秋山、マチルダならちっこい戦車でやれるか？」

優花里「うーん、どうでしょうかね、私も試合が初めてなので…西住殿ならわかるのでは？」

零「ん」

零「西住、どうだ？」

みほ「うーん、側面ならなんとか…でも他の車両の主砲はほとんど40mmにいかないから…私もわからない」

零（駄目じゃん）

沙織「あ、見えてきたよ！」

零「ん、あれか」

沙織「屋台が沢山ある！、リングオアメもあるよ、私あれが食べたい！」

華「いいですね、私は綿あめが食べたいですね、試合が終わったら買いに来ましょう」

沙織「え〜」

麻子「ケーキが食べたい」

優花里「それなら私いい店知ってます！」

零（緊張感ねえな…まあそのほうがいいけど）

零「あ、秋山、ちよいと用事があるから運転を頼みたいんだが…」

優花里「え?! いいですか！」

零「おう、じゃあよろしく」

優花里「いやっほうううう!!!」

零（誰だよ）

みほ「海月君、どこに行くの？」

零「ちよいとナスル会いに」

みほ「？」

く港く

零「おっさーん」

「ん? おう、来たかロゼ」

零「わざわざすまん」

「気にすんな、仕事だからな」

零 「ナスルは？」

「今船が下ろしてるとこ、にしてもまさかお前がまた戦車に乗るとはな」

零 「まあいろいろよ」

「聞いたぜ、戦車道つてやつをやつてゐるんだろ？」

零 「ん、あと少して試合だよ」

「そうなのか、なら見に行つてやるよつと言いたいところだがこれからまたロシアに行かなくちゃならん」

零 「ロシア？またなんで」

「名前は忘れたが学校がKV2を欲してるとよ、だからロシアまで行つて運ぶ訳よ」

零 「ふーん」

零 「そろそろ行くよ」

「おう、風に気おつけろよ」

零 「おっさんも」

T72「」

零 「…久しぶりだな」

（駐車場）

零 「ここに止めておけばいいか」

ガヤガヤ♪

零 「祭りか… 時間は少しあるな」

く少し歩いてく

零 「おーいろいろあるな」

バシユツ

零 「ん？」

屋台のおつちゃん 「残念、お嬢ちゃん」

「うううう…」

「もう一回…」

屋台のおつちゃん 「やめときなってお小遣いがなくなってしまうよ？」

「これが最後…」



屋台のおっちゃん「わかったよ、はい」

バシユツ グラグラ ピタ

「あっ…」

屋台のおっちゃん「惜しかったね、はいあめちゃん」つ

「ん」シユン

零「おっちゃん、三発くれ」

屋台のおっちゃん「はいよ」

零「ちびっ子どれが欲しいんだ？」

「え…えっと…あれ」指さし

おっほ（、ω、）ボコ!!

零「ん」

バシユツ バシユツ バシユツ

グラグラ グラグラ おっほ（、ω、）

屋台のおっちゃん「いい腕してるな」

零「ん、はいよ」つボコ

「いこの…っ」

零「おう」

「その…ありがとう…」

グウ

「あ…／＼／＼」

零 「…なんか食べるか？」

「え…でもボコを取ってくれたうえに…ご馳走になるのは…」

零 「気にすんな、子供が遠慮するな、それにちよいと金に余裕があるんだ」

「ほんとに…いいの…？」

零 「ん」

「…ありがとう」

「私…愛里寿」

零 「ん？」

愛里寿 「私の名前」

零 「おう、俺は海月だ、じゃあ愛里寿、何が食いたい」

愛里寿 「えっと、焼きそば…」

零 「うんじゃ行くか」

愛里寿 「手」

零 「ん？」

愛里寿「手…つないでもいい？」

零「いいよ、はい」つなぎ

愛里寿「ありがとう」

く 試合時間数分前く

愛里寿「お腹いっぱい」

零「美味しかった？」

愛里寿「うん…あっ私このあと用事があるんだった」

零「そうか、じゃあここでわk…はっ！やべ！俺も用事があるんだった」

愛里寿「そうなの？、じゃあここでお別れだね」

零「そうだな、一人で大丈夫か？」

愛里寿「うん大丈夫、近くだから」

零「そうか」

愛里寿「また…会える？」

零「うーん、いつ会えるかわからないけどまたどこかで会えると思う」

愛里寿「分かった、じゃあバイバイ」

零「おう、じゃな」

く会場前く

零（なんとか間に合いそうだ…ん？）

「いいじゃんかよ」

「俺たちと遊ぼうぜ」

「いいよ来いよ」

「金 暴力 S〇X」

美少年「は、離してください!!、警察呼びますよ!?!」

零（…なんだあれ?、）

「そのの殿方、おやめなさい」

零（今度は誰だ?）

「だ、ダーズリン様、や、やめましょう…」

「む?なんだ女…俺はただこいつのケツを食いたいだけだ」

「そうだよ（便乗）」

「114514」

零（やっぱりホモじゃないか！（歓喜） つて違う違う）

零（どうするよ…この状況初めてだ…）

「f000000!!いいっすね〜」

「そこのお前」

零「えっな、何ですか？」

「いい体してんじゃん」

「ちよつと脱げよ」

零「い、嫌だ（ん？美少年逃げやがった…）」

零「俺はノンケなんだ」

「なんだと!?!女の体どこがいいんだ!?!」

零（何かキレたぞ）

「男の体の良さを教えてやるよ!」

「~~~~~」

零（語りだしたよ…つかあの三人は？）

「…」

「…」

「…」

零（あ、まだ居たんだ）

「どうだ？素晴らしいだろ」

零「え？そうつすね（やべ全然聞いてなかった）」

「金 暴力 S〇X」

「ん？そうか、すまぬが俺たちは行くわ」

零「あ、はい」

「これ俺のアドレスだ」

零「…」

「じゃあな」

「金 暴力 S〇X」

ダーズリン「あら、終わりましたの？」

零「（呑気に紅茶飲んでるよ、つかどっから出した）ん、終わったよ」

ダーズリン「貴方もどう？」

零「いや、いい急いでるので」

くく

沙織「遅い！」

零「すまん、ちよいと遅くなつた」

沙織「全然ちよいとじゃないよ！」

沙織「彼女とのデートで遅れた好感度下がるんだよ！」

零「いや、俺彼女いないし…」

沙織「罰として後で奢つてよ」

零「まあ、いいよ」

沙織「え、いいの？」

零「なんで驚いてるんだよ」

沙織「冗談で言つたつもりなんだけど…」

麻子「私も食べたい」ヒョコ

零「いいよ」

華「私もいいですか？」

零「ん、西住もどうだ？」

みほ「海月君、お金は大丈夫なの？、結構な額だよ？」

零「うーん、T72が13両は買えるぐらいは持つてる」

みほ「え!?、そんなに？」

零「おう」

みほ「何でそんなに持つてる？まだ高校生だよね？」

零「あれ？言つてなかつたつけ俺今19歳なんだよ」

沙織「え？年上!!」

零「うん」

沙織「じゃあずっと働いてたつて事？」

みほ「でも普通はそんなに稼げないよ」

沙織「なんの仕事してたの？」

零「んー？まあいろいろ」

沙織「そっかー」

みほ「…」

華「あ、相手側が決まりましたわ」

零「ん…ん？…お、お前は!？」





K  
B  
S 「金！暴力！S○X！」